様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２８２２

研究課題名（和文）作品・分野別漢文教育実践史に基づく漢文教育改善の研究

研究課題名（英文）Research on improving the education of Chinese classics based on the history of Chinese classics education practice by works/field in Japanese school.

研究代表者
渡辺　春美（Watanabe, Harumi）

高知大学・その他部局等(名誉教授)・名誉教授

研究者番号：１０３２０５１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究（2019～2023年）では、我が国の漢文教育実践の活性化を目指し、思潮史、実践史、作品・分野別実践史、実践個体史の考察を行った。作品・分野別実践史については、論語・漢詩・史伝・日本漢詩文・漢詩創作の実践史を考察した。本研究によって、活性化を目指した漢文教育実践の歴史を把握することができた。また、文献目録（2006～2023年）を作成し、840編を掲載した。
　本研究の成果は、報告書『戦後漢文教育実践史の展開―漢文教育思潮史・実践史・個体史にむすぶ実践の創造―』（2024年3月　全438頁）にまとめた。本研究の成果が、日本における、現代と未来の豊かな漢文教育の創造に資するものと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　漢文教育に関する学習者の否定的意識は依然として高い。言語文化の継承と発展を考えれば、漢文教育の改善は切実な課題である。本研究は、その課題に応えるものである。
　その意義は、1. 作品・分野別に戦後漢文教育実践の成果と課題を史的に検証し、今後に目指すべき漢文教育の改善のあり方を展望した点、2. 戦後の優れた授業実践論稿を考察し、漢文教育活性化の理論と方法を明らかにした点、3. 個々の漢文教育実践を個体史の方法によって考察し、生々しい漢文教育創造の根幹に迫り、漢文教育に取り組む教師に示唆と創造的な学習指導の方法を具体的に与えた点、4. 国語教育学研究の課題の一つである実践史研究を進めた点に認められる。

研究成果の概要（英文）：　In this research, we examined the history of thought (theory), practical history, practical history by works/field, individual practical history with the aim of activating the practice of Chinese classics education in Japanese schools. Regarding the practical history of works/field, we considered the practical history of "Rongo", Chinese poetry, historical legends, Japanese Chinese poetry, and the creation of Chinese poetry. Through historical research, I was able to recognize achievements and challenges on Chinese classics education practices in Japanese schools aimed at activation. In addition, a bibliography (2006-2023) was made, with 840 articles listed. I published the results of this research as a report titled ``Development of the history of postwar Chinese classics education practice in Japan '' (March 2024 total 438 pages). I believe that the results of this research will contribute to the creation of a rich Chinese classics education in Japan for the present and future.

研究分野：国語教育学

キーワード：漢文教育　漢文教育実践史　漢文教育個体史　漢文教育の理論　漢文教育の活性化　漢文教育の方法　漢文教育の授業改善　漢文教育文献目録

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

一　研究開始当初の背景

平成二七年度高等学校学習指導要領実施状況調査によれば、「漢文は好きだ」という質問に対して，「否定的な回答をしている生徒の割合は　六一・九％（前回調査　七一・二％）」となっている。前回に比べて改善されたとはいえ、漢文教育は、なお、多くの課題を抱えている。

漢文教育には、戦後（昭和二〇年～）に限っても、七〇年を超える歴史がある。その内実としての実践を歴史的に考察し、成果と課題をとらえる必要がある。その上で、現在および将来に、どのような漢文教育をどのようにして創造するかが問われることになる。そのための基礎研究として、漢文教育思潮史・実践史・個体史・課程史・作品・分野別漢文教育実践史の研究を行いたい。それを踏まえ、活性化された豊かな漢文教育を構想し、授業改善につなげたい。

二　研究の目的

本研究の目的は、以下にある。

(1)漢文教育実践を支えた各時代の漢文教育思潮を史的に把握する。

(2)漢文教育に影響を及ぼした教育課程（学習指導要領）を史的に把握する。

(3)戦後における中・高等学校の漢文教育実践を史的に位置付け、実践史を明らかにする。

(4)戦後作品・分野別漢文教育実践史、漢文教育実践個体史を把握する。

(5)最後に、将来にわたって求めるべき、中・高等学校における漢文教育を「関係概念」としての古典観に基づき展望する。

三　研究方法

１　研究対象

漢文教育を構想するために、終戦直後から現在までを範囲とし、漢文教育実践の展開を歴史研究の方法により把握する。対象は、中・高等学校の漢文教育に関する実践論文等の資料である。資料は、できる限り広く探し考察を加えるが、本論の記述は、①漢文の学習指導の活性化[i]を切り拓く契機となった実践、②課題意識に基づき継続的に取り組まれた実践、③漢文の授業の全体像が把握できる実践、④学習者による学習の記録を掲載している実践の資料を中心に考察する。「④」は、実践の有効性が、学習者の側からも考察される必要があることによる。

２　方法

(1)本研究の基本的研究方法は、上記実践資料等の文献に基づく歴史研究である。しかし、考察の対象とする実践資料には不完全なものが多い。また時代によって実践資料の量に大きな差がある。資料の不備・不足や、時代による量の寡多の偏りにより、実践資料の他に、指導構想案等の資料を補足的に用いることもある。

(2)漢文教育実践史研究を進めるに当たり、(1)で述べた実践資料の不完全性を補うために、①教材観、②指導目標、③指導過程（導入・展開・結び、基本・応用・発展）に基づいて実践を再現し、その上で考察を加えることにする。これは、かならずしも再現したものを記述することを意味しない。主に、記述の前段階の考察過程を意味している。

(3)本研究においては、問題意識をもって継続的に取り組まれた実践を考察するために「国語教育個体史」[ii]の方法も生かすことにする。「国語教育個体史」の方法によって、個々の漢文教育実践の創造の根幹をとらえることが可能になると考えるからである。

(4)　実践の考察は、漢文教育の思潮、学習指導要領の改訂、学習者の実態の変化、授業者の教育観・漢文観等に配慮して行う。実践の考察は、可能な限り、ア．教育観、イ．漢文教育

観、ウ．教材観、エ．指導目標・内容、オ．指導方法、カ．実践の特色、キ．学習者の学習の実態に求める。その上で、成果と課題を史的に位置付けていく。

(5)戦後における漢文教育実践の展開をとらえ、成果と課題を把握し、それに基づいて、小・中・高等学校で授業を試み、検証して求めるべき漢文教育を構想する。

四　研究成果

１　漢文教育思潮史

冨安慎吾は、漢文教育観の典型性の成立過程を中心に史的把握を行った。漢文教育観の典型性としては、次の三点を挙げている。(1)授業編成の典型性―「読むこと」の領域として「現代文」「古文」「漢文」が別々に取り扱われていること、(2)教育内容の典型性―教育内容として、「漢文を訳読する力」の習得が重視され続けていること、(3)テキスト形態の典型性―形態が「訓点文」に固定されていることの三点である。これらの典型性の成立は、戦後の整備期（昭和二〇～二六年）・多様期（昭和二七～三〇年）・収束期（昭和三一～四〇年）に分けて辿られ、典型性の成立は、昭和三〇年代半ばとされる。

２　漢文教育実践史

漢文教育実践史の研究では、昭和二〇年代から平成年代の実践で、それぞれの時代の漢文教育を切り開いた特徴的な実践を取り上げて考察し、以下のことを見出した。

(1)昭和二〇年代の漢文教育実践は、経験主義に基づいて学習者の興味・関心・問題意識を喚起し、主体的な言語経験を与えることを重視した。この時期以後も、班別学習、調べ学習、比較学習による理解の深化、創造的な内容理解の学習指導等は、実践に引き継がれた。さらに、学習者の興味・関心・問題意識に配慮し、教材開発・編成がなされ、引き継がれている。

(2)昭和三〇年・四〇年代の能力主義の時代の漢文教育実践は、鑑賞力・批判力等の能力育成が意識され、創作批評活動を通して、鑑賞力、批判力等の能力の育成が目指された。

(3)昭和四〇年代には、情報機器の活用による効果的な実践が見いだされたが、継続されるにはいたっていない。読みの技能に基づく分析批評による実践も試行に留まっている。

(3)昭和五〇年代になると、和漢の総合化を意識した比較読みの学習指導がなされた。主題の基に和漢の教材を開発・編成した主題単元学習につながる実践なども行われた。

(4)平成年代では、学習者の興味・関心・問題意識を授業に結びつけ、主体的な言語活動を通して表現力を育てる実践が試みられるようになった。また、学習材が、目標、言語活動、学習形態に基づいて開発された。調べ学習による協働学習を通して読みを深める実践も学習材の開発・編成とともに積極的に行われるに至った。

今後は、これらの実践論考の掲載誌の偏りにも留意し、平成年代を含む各時代の実践論考の収集にも努め、精細に把握し、史的に位置づける必要がある。

３　漢文教育個体史

次の六名を対象として漢文教育個体史を記述した。

(1)清田清は、戦後初期の昭和二〇年代から昭和四〇年代前半にかけて、時の権力に左右されない普遍的漢文教育を求めた。実践に関しては、客観的・合理的解釈に基づきつつ、創意工夫して生徒の主体性を尊重した指導を行った。

(2)稲益俊男は、昭和五〇年代を中心に、漢文教育に意欲的に取り組んだ。漢文を文学ととらえ、言語技術主義と徳目主義を批判し、漢文による主体的文学体験の成立に働く文学の人間変革の機能によって、高校生に時代状況に立ち向かい、生き生きと生きる力を養おうとした。

(3)佐野泰臣は、昭和五〇年代を中心に、当時導入されつつあった情報機器、ＯＨＰを使用し、

指導過程を段階的・発展的に構造化し、教材を開発・編成して、グループ学習を組み入れ、生徒による解釈発表と質疑応答によって理解を深める学習指導を行い、成果を収めた。

(4)長谷川滋成は、昭和四〇年代後半から昭和五〇年代に、漢文教育の実践と理論化に取り組んだ。漢文教育の意義は、日本古典の母体の継承、新しい文化創造、人生の充実の三点に見いだされた。方法に関しては、「言語教育」を「文学教育」につなげ、両者の総合化・融合化を求め、多様な工夫の基に、主体的な学習を通して学習者の認識を深める実践を試みた。

(5)小倉勇三は、漢文指導の主眼を、反復と集積による「覚えること」と「成就感」に見出した。生徒の実態を考慮し、教材を精選し、授業を定式化し、ノート指導や授業に重点事項を設定するなどの工夫を凝らし、漢文読解のための知識・技能を習得させる学習指導を試みた。

(6)江川順一は、平成年代初期に創造性に富んだ漢文教育実践を展開した。古典の意義は、文化伝統の認識と人間形成に認めている。授業には、学習者に寄り添い、導入教材による興味・関心の喚起から読みに進み、表現活動を通して漢文理解を深めるという動的展開が窺える。

４　作品・分野別漢文教育実践史の展開

(1)『論語』―『論語』を批判し現代的意義を求める実践（一期）、『論語』観の転換（二期）、思想を受容する読解中心の実践（三期）を経て、孔子の人間像の追求（四期）、ドラマを創造する実践（五期）、解釈を生み出す実践（六期）へと展開したととらえられる。

(2)漢詩教材―実践史を平成年代に絞り、学習指導要領の改訂に基づき、三期に区分して考察した。改訂教育基本法（平成一八年）を経て、郷土教材の増加、教材の開発編成が見られた。実践には、朗読・群読、ドラマ化、訳詩などの方法が各期に見られ、理論化も模索された。

(3)史伝教材―意義は、歴史的現実を生きた人間の姿を現実感をもって受けとめ、自己の人生観・世界観を形成する点に見出された。実践は、経験主義から能力主義に基づく訓詁注釈的・読解的学習指導に移り、その後、昭和四〇年代から学習者の興味・関心を重視した学習指導が行われ、昭和五〇年代後半には、ゆとり教育の中、停滞が見られるが、平成年代以降、興味・関心を高め、班活動を取り入れて主体的に言語活動に取り組ませる実践が多くなっている。

(4)日本漢文・漢詩教材―戦後初期には、軍国主義形成の責任が問われた。昭和四〇年代後半に至り、人間形成の面からの価値が主張され、教材は微増し、実践報告も漸増した。平成に入ると国際化の中で日中の文化理解の教材として価値が強調されたが、実践は乏しい。平成一八年の教育基本法改訂を受け、郷土教材による実践がなされるに至った。新たに日本的感性・思想を育成する視点から教材研究、教材化がなされ、実践による検証もなされるに至った。

(5)漢詩創作指導―平成年代に至って漢詩指導が徐々になされるに至った。一九九〇年代は、自由律による創作がなされ、興味・関心を高め、意欲的に取り組む学習が行われた。二〇〇〇年代には、漢詩創作の理論化と詩語表の使用などの方法が具体化され、小学校でも実践された。二〇一九年以降、漢詩創作論には、近体詩の規則を遵守するか否かの分化が見える。これは、指導者の指導の可否という力量問題に結びつき、本質的な漢詩創作論に至っていない。

５　漢文教育実践

実践は、小学校・中学校・高等学校ごとにまとめた。

(1)小学校の小野桂は、「生活に最も役立ちそうな論語を一章選んで紹介する」ことを目標として、①言語抵抗の削減、②ワークシートの作成、③子供の発言の可視化と位置づけ、④読みと思考を深める話題の提供、⑤音読・暗唱等を工夫し、学習者の興味・関心を高め、理解を深めた。

(2)石村由里の『論語』の実践（中学校二年生）では、職場体験で心に深く残ったことを『論語』の言葉で表現させ、体験の説明を添えて色画用紙に清書し、後輩の一年生に伝えた。『ビギナーズ・クラシックス中国の古典「論語」』と『マンガ「論語」完全入門』を全員に持たせ、六三冊の参考書籍を準備し、『論語』と出会わせ、学習者の心に生きるものとした。

(3)石村由里の「故事成語」の実践（中学校一年生）は、「自分自身で調べた故事成語の内容をカルタにして最終場面で遊びながら共有する単元」である。カルタ大会は、実の場としても働き、そこに至る故事成語の学習に必然性を持たせている。それぞれのグループで、五十音順に六音から始まる故事成語の六枚のカルタを作成し、カルタ大会を楽しんだ。本実践は、石村由里のいう「学びの車輪が回り始めると、自立して進んでいく」学習の典型を示している。

(4)大栗真佐美の漢詩の実践（中学校三年生）では、改元の「令和」の典拠となった『万葉集』（五巻）「梅花の歌」の漢文の序文を用いて漢文に関心を持たせた。また、『湯島聖堂　漢文（論語・漢詩）検定　寺子屋編テキスト』を用いて、帯単元で多数の漢詩と出会わせ、学習者のお薦めの漢詩を絵画化（教科横断授業）するとともに、作者や背景について調べ、深く鑑賞・批評してグループで交流し、学び合いをとおして内化していく授業を試みた。

(5)吉田茂樹は、漢詩教材の授業（高等学校二年生）で、学習者が「想像力を駆使してイメージ豊かに漢詩の世界を創り上げていく能動的な立場へと転換」する工夫として訳詩に書き換える実践を行った。訳詩は、一貫した解釈、心情の実感的な理解が求められ、必然的に詩の言葉や表現を調べざるをえない。さらに、訳詩の表現のために言葉を吟味・精選する主体的過程が必要となる。授業は、訳詩を通して、主体的に取り組む姿勢を引き出し、成功を納めている。

ここに報告された漢文教育の実践は、活性化された豊かな漢文教育の可能性を示唆するものといえよう。なお、冨安慎吾により、文献目録（二〇〇六～二〇二三年）も作成された。

６　漢文教育の展望

以上、戦後における、漢文教育思潮史、漢文教育実践史、漢文教育個体史、作品・分野別漢文教育実践史の研究を進めた。研究の成果を踏まえ、現状の漢文教育を、興味深く、学び甲斐のある、豊かな漢文教育に改善していくための方策について考え、漢文教育実践を試み、考察を加えた。漢文の授業を活性化するためには、学習者が興味・関心を持って主体的に取り組む授業づくりが必要になる。そのためには、興味・関心を喚起する価値ある学習材の開発、個に応じた多様な学習方法の開拓、活動的な学習方法の開発、協同による学びの深化、物語化、訳詩などの創造的学習、段階的に技能の獲得と認識の進化を可能にする基本→応用→発展とする指導過程の開発を考えたい。また、漢文教育を効果的なものにするためには、旧来の「典型概念」に基づく漢文教育から、創造的価値発見のための「関係概念」に基づく漢文教育へと漢文観そのものを変える必要もあろう。さらに研究を続けたい。

詳しくは、報告書『戦後漢文教育実践史の展開―漢文教育思潮史・実践史・個体史にむすぶ実践の創造―』を参照されたい。

【注】

i　活性化された授業は、次の二点を備えた授業である。①学習者が主体的に参加し、生き生きと取り組む中で、何事かを発見し、認識（感動）を深め、充実感、達成感を得ることのできる授業、②一連の学習の過程で、将来にわたってことばをとおして豊かに生きるための、話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと、および言語事項に関わる国語の力を身につけ、一人の学び手として育っていくことのできる授業の二点である。

ii　野地潤家『国語教育―個体史研究―』（一九五六年三月　光風出版刊　二四頁）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　9件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 渡辺春美	４．巻 33
２．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―日本漢文・漢詩教材の場合―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国語教育学研究誌	６．最初と最後の頁 66-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺春美	４．巻 12
２．論文標題 戦後漢文教育実践史の研究―平成年代の漢詩教育を中心に―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 九州国語教育学会紀要	６．最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺春美	４．巻 37
２．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―漢詩創作指導の場合―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 語文と教育	６．最初と最後の頁 16-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/0002000403	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡辺春美	４．巻 21
２．論文標題 安藤信廣の漢文教育論―『漢文を読む本』（一九八九年　三省堂）を中心に―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 国語論集	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32150/0002000138	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡辺春美	4．巻 34
2．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―戦後初期漢文単元学習の構想と試行―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 国語教育学研究誌	6．最初と最後の頁 1―17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 渡辺春美	4．巻 13
2．論文標題 戦後漢文教育の展開―長澤規矩也の漢文教育論―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 九州国語教育学会紀要	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 渡辺春美	4．巻 12
2．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―長谷川滋成による言語教育と文学教育の総合化―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 語文と教育	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 渡辺春美	4．巻 33
2．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―日本漢文・漢詩教材の場合―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 国語教育学研究誌	6．最初と最後の頁 66-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 渡辺春美	4．巻 12
2．論文標題 戦後漢文教育実践史の研究―平成年代の漢詩教育を中心に―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 九州国語教育学会紀要	6．最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺春美	4．巻 11
2．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―『論語』教材を中心に―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 九州国語教育学会紀要	6．最初と最後の頁 40-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺春美	4．巻 70
2．論文標題 戦後の実践史から見た漢文教育の現状と展望	5．発行年 2020年
3．雑誌名 新しい漢字漢文教育	6．最初と最後の頁 25-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 渡辺春美	4．巻 34
2．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―『新しい漢字漢文教育』誌を中心に―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 語文と教育	6．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24727/00029019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 渡辺春美	4．巻 10
2．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―史伝教材を中心に―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 九州国語教育学会紀要	6．最初と最後の頁 72-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

1．著者名 渡辺春美	4．巻 9
2．論文標題 戦後漢文教育実践史の展開―江川順一の漢文教育実践の場合―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 九州国語教育学会紀要	6．最初と最後の頁 155－168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 渡辺春美
2．発表標題 戦後漢文教育の展開―長澤規矩也の漢文教育論―
3．学会等名 九州国語教育学会
4．発表年 2023年

1．発表者名 渡辺春美
2．発表標題 戦後漢文教育実践史の展開―戦後初期漢文単元学習の構想と試行―
3．学会等名 全国大学国語教育学会
4．発表年 2023年

１．発表者名 渡辺春美
２．発表標題 戦後漢文教育実践史の展開―平成年代を中心に―
３．学会等名 中国四国教育学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡辺春美
２．発表標題 戦後漢文教育実践史の展開―思想教材を中心に―
３．学会等名 第73回　中国四国教育学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 渡辺春美
２．発表標題 戦後漢文教育実践史の展開－史伝教材を中心に－
３．学会等名 中国四国教育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 渡辺春美
２．発表標題 戦後漢文教育実践史の展開―『新しい漢字漢文教育』誌を中心に―
３．学会等名 広島大学教育学部国語教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺春美
２．発表標題 戦後漢文教育実践史の展開―江川順一の漢文教育実践の場合―
３．学会等名 九州国語教育学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 渡辺春美・冨安慎吾・小倉桂・石村由里・大栗真佐美・吉田茂樹	４．発行年 2024年
２．出版社 オリンピア印刷	５．総ページ数 438
３．書名 戦後漢文教育実践史の展開―漢文教育思潮史・実践史・個体史にむすぶ実践の創造―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

冨安慎吾「漢文教育関係論文データベース」 https://kokugo.notion.site/6819d0bc9648441fadd6bbb1a1d799c6

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	冨安　慎吾 (TOMIYASU SHINGO) (40534300)	島根大学・学術研究院教育学系・准教授 (15201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関